

【盂蘭盆会・施食会のお話】

『盂蘭盆経』には、目連尊者が、餓鬼道に落ちた母を救うために釈尊に教えを請い、釈尊がそれに答えて救済の方法を説いたとある。簡略で分かりやすい内容で盂蘭盆会の典拠となったものである。

『盂蘭盆経』の構成は、盂蘭盆の教えが説かれた時と場所、およびそのきっかけとなる目連の母の悲惨な状況が説明された「序分」と、釈尊によって盂蘭盆の教えが説かれ、その教えの効能が目連の母の救済という形で示された経典の中心となる「正宗分」と、経典の利益を一般的に述べ、教示の実践を勧奨する「流図通分」の三つの部分に分けられる。

「盂蘭盆」の三文字は、「盂蘭」が梵語の「ウランバナ」の音写で逆さ吊りの意味で、「盆」は中国のことばで「食べ物を貯える清らかな器」の意味であった。

さて「序分」で説かれている、目連尊者の母親が餓鬼道に落ちた理由は「汝母罪根深結」とあるだけであり。他の詳しい経典では次のようにある。

定光仏の時代に、目連は羅ト(らぼく)という名で、母親は青提(しょうだい)という字だった。羅トは旅行に出ようと思い、その母親に頼んでいった「もし来客があったら、お母さん必ず食事を出してください」と。出かけた後、お客さんが来たが、母親は食事を出さなかった。それどころか食事の席を設けたように見えるよう偽りの形跡を作りあげ、羅トが帰ってきて「どんなふうにもてなしたのですか」と尋ねると、母親は「お前は食事を出した場所を見てこなかったのかい」と言った。それから五百回生まれ変わるあいだ、慳(ケチ)を続けた

一般に餓鬼道に落ちる理由は、心に慳や嫉みが生じ、施し与えようとしないことが原因で、目連の母親は餓鬼道に落ちてなお慳貪な心が消えなかったとされる。

そして釈尊は、餓鬼道の母を救うために、七月十五日の自恣の日(修業期間が終わり、反省の日)を迎えた僧侶と母に供養することによって、目連の母親は救われたとされる。

盂蘭盆の教えによって我が母を救済することができた目連が、母を愛する慈愛の情を衆生界へ押し広め、全ての餓鬼道に落ちたものを救う教えが『盂蘭盆経』の教えである。



国宝『餓鬼草子』
目連尊者の母を救う図

一方、「施食会」の言われは『盂蘭盆経』の教えとは異なる。典拠になる経典は四種ほどあるが、弘法大師空海が日本に将来したと言われる不空訳の『焰口餓鬼経』がよく知られている。

それには、阿難尊者が独り静かな場所で瞑想していると、夜中に突然、焰口という餓鬼が現れ「これから三日後に、あなたの寿命は尽きて餓鬼の世界に生まれ変わるだろう」と告げられた。

阿難は大変恐怖したが、焰口餓鬼と釈尊が言うように、多くの餓鬼と諸々の婆羅門や仙人に沢山の飲食を供養し陀羅尼を誦え四如来の名号を称えて祈祷することによって救われた。

現在の臨済宗の施食会法要では七如来の旗を飾り誦える。本来は五如来だったともいわれ他宗では五如来の旗を飾るところもある。

以下に、五如来の功德を挙げる。

○宝勝如来は多宝如来と同じ。むさぼりの業のため餓鬼世界で苦しむ者を救済し、円満ならしめる仏である。宝勝如来と釈迦如来は本来同一であったという。

○妙色身如来は、阿閼仏のことで、悪業のため醜い身体・形相の餓鬼を救う仏である。妙(美しい)なる色身(からだ)の仏、「無瞋恚」と同じ意で、怨みや怒りから解放された状態。

○広博身如来は、大日如来のことで、食事を欲しても食べることのできない餓鬼の苦しみを救う仏。飲食の楽しみを与える密教系統の仏。

○離怖畏如来は釈迦のことで慈悲の仏。餓鬼は常に恐怖におびえているため、その恐怖を取り除くことを目的とした仏。

○甘露王如来は阿弥陀で。餓鬼世界は苦しみの世界で、その苦しみを取り除き、心身を安穏ならしめる仏である。甘露は心身を潤すこと。

さて、『盂蘭盆経』では餓鬼道に落ちた目連尊者の母親の救済のために、衆僧と母の供養が説かれ、『焰口餓鬼経』では阿難尊者自身が餓鬼道に落ちないために、無数の餓鬼に飲食を施すことが説かれている。行事と供養の意味合いは違えど、

施 (引用文献)

お盆と彼岸の供養『開甘露門の世界』
野口善敬(現妙心寺派宗務総長) 編集
禅文化研究所発行



国宝『餓鬼草子』阿難尊者に授けた施餓鬼会が執り行われる図

